

○講演② イタリア「オルチャ渓谷地域の自立的な運営と

ヴィア・フランチーゼナ街道」

独立行政法人東京文化財研究所 客員研究員 Mizuko Ugo

(資料1)



(Ugo)

本日はイタリアの Val d' Orcia (オルチャ渓谷) の事例について皆様の前で話していただける機会をいただきまして、まことにありがとうございます。今回、皆様に発表いたします内容につきましては、ローマ大学のパウラ・ファリーニ教授から提供いただきまして、まとめました。ファリーニ教授は、この地域の管理計画を作成する時に、実際にかかわった方であります。

(資料2)



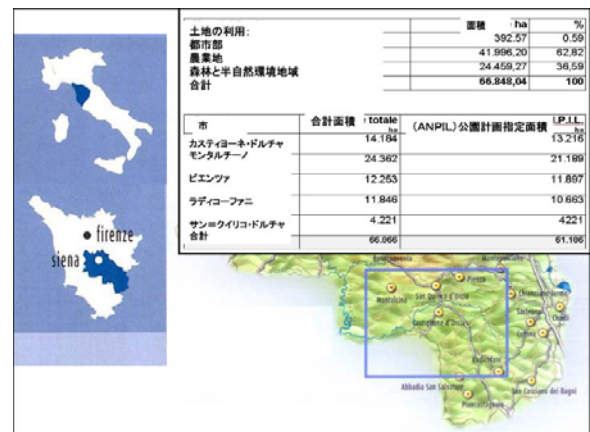
本日の私の発表ですけれども、3つのセクションに分けてお話ししたいと思います。

まず第1は、オルチャ渓谷がどういったとこ

ろにどのように存在しているかといったこと、その景観の中身についてお話しします。第2といたしましては、このような景観や地域を守っていく上で自主的管理を可能にするために、国内にどのような法律や手法などがあるかというご説明をいたします。3つ目といたしましては、オルチャ渓谷にそのような自主管理が実行された結果、どのような結果とか実行が生まれているかということをご説明いたします。

トスカーナ州がこれ全体です。イタリア半島の地図の、この黒く塗った部分がトスカーナ州です。その州の中におきまして、ブルーで塗った部分がオルチャ渓谷の地域になるんですけども、これはフィレンツェの近くのシエナ県に属しています。全体に大きく描いてありますのがシエナ県全体で、真ん中よりちょっと上のほうにあります「シエナ」と書いてある奥がシエナ市です。そして、右下のほうにブルーで四角く囲ってあるところが主にオルチャ渓谷でありまして、それは5つの市町村から成り立っております。

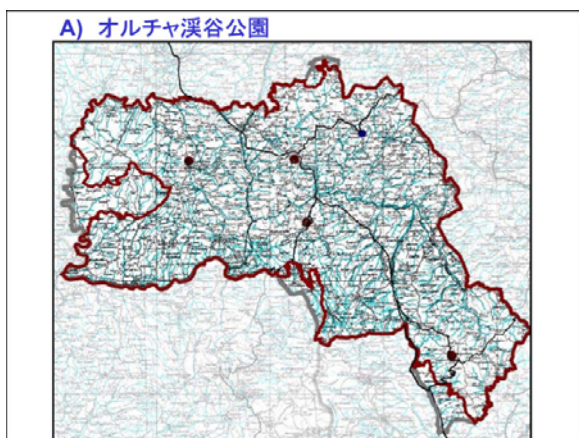
(資料3)



イタリアの地域の統治方法といたしましては、まずトスカーナ州のような、州という単位

があります。その次に県、この場合はシエナ県ですが、その次に市町村といった自治体があります。6万6000ヘクタールほどの地域であります。比率でいいますと、集落といいますか、住宅地は0.59%と非常にわずかです。農業に使われている面積は62.8%、森林などが36.59%といった比率になっております。人口はおよそ1万4000人おります

(資料4)



赤い線で囲ってあります地域がオルチャ渓谷保護地域になります。そして、5つの市町村の中心地が丸く記されております。5つは、

(資料5)



カステリオーネ・ドルチャ  
(Castiglione d' Orcia)、

(資料6)



モンタルチーノ市

モンタルチーノ (Montalcino)、

(資料7)



ラディコーファニ市

ラディコーファニ (Radicofani)、

(資料8)



ピエンツァ市

ピエンツァ (Pienza)、



(資料 9)



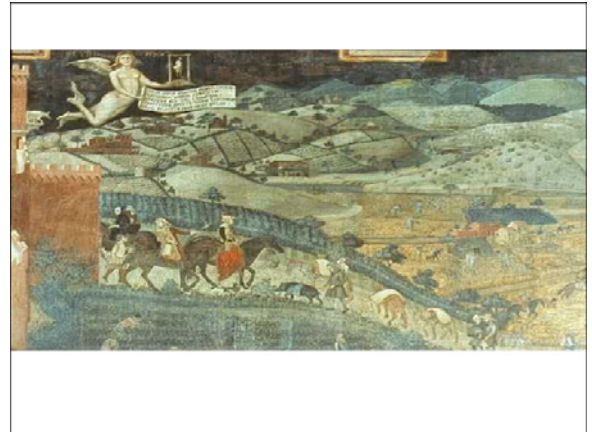
そして、サン・クウィリコ・ドルチャ (San Quirico d'Orcia)。この町に公園を管理する事務所が置かれています。

(資料 10)



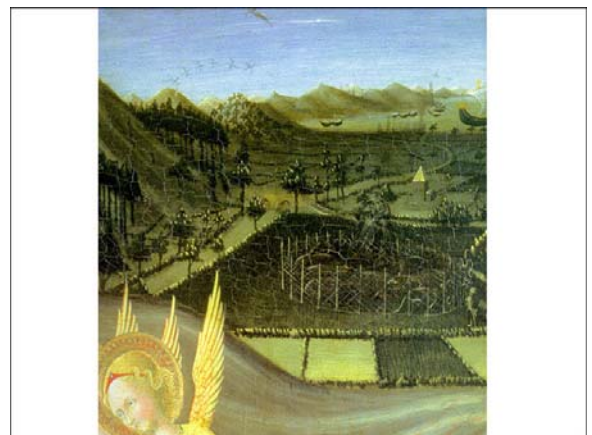
まず典型的な土地の状態をお見せしますと、下には平地が広がっておりまして、そして上のほうにこの地方特有の丘が見えます。平地のほうは土壌が粘土質を非常に強く帯びておりますので、開墾するのなかなか骨が折れます。農業に適した土地にするには大変な努力が要るところです。

(資料 11)



それでも中世の 14 世紀ごろから、この土地を開墾して農業に充てようとした動きがありました。これが 1300 年代の絵でありますけれども、このように土地を開墾して樹木を植えたり、農業に転換をしているところがうかがえます。

(資料 12)



こちらも同じように中世の絵ですが、開墾して農作物が植えられているのが見えます。

(資料 13)



また、この同時代の絵には集落や街道、牧者たちの姿が描かれています。

(資料14)



このようにこの地域におきましては、中世の14世紀から醸造用のブドウが植えられていたということも絵からわかります。

(資料15)



こちらからも同じような中世のこの地域の様子がうかがえます。畑、街道が見えます。

(資料16)



こちらは、黄色と赤の実線で見えますのが、今日この地方における道路や街道の位置です。この中には特に有名なフランチージェナ街道というのがありまして、これは非常に古く、古代ローマ時代につくられた街道で、イギリスからエルサレムへと続く巡礼者の道でもありました。

(資料17)



ヴィア・フランチージェナ街道

イギリスからローマへ、そしてエルサレムへと向かう巡礼路であり、古代ローマ時代から数多くの国々をつなぐ重要な役割を持った。

現在では石畳よりもアスファルト舗装が多くなっているが、街道沿いには中世以降の教会や修道院、巡礼者の宿舎や宿駅が立ち並び。

こちらはフランチージェナ街道の村を通る部分ですけれども、それほど歴史を大事にとどめているとは言えません。



(資料18)



街道の道筋自体はずっと歴史的に同じものでありますけれども、部分的には今の写真のように新たに近代的なアスファルトで固められたところもあります。

(資料19)



このオルチャ渓谷の地方には、たくさんの歴史的な建造物や記念物がいまだに残っております。

(資料20)



ラディコーファニ塔

例えばこれはラディコーファニにあります城砦で、これは中世の時代、シエナ共和国とローマ法王の領地との境界のあたりに建てられました。

(資料21)



ロッカ・ディ・テンテンナーノ城塞

こちらはテンテンナーノ (Tentennano) の城砦です。

(資料22)



バラツツォ・マッサイニ館

マッサイニ (Massaini) 宮殿。

(資料 2 3)



また、教会や修道院もたくさん残っています。

(資料 2 4)



サントアンティモ (Sant' Antimo) 大修道院。

(資料 2 5)



コルシリアーノ (Corsigliano) 修道院。

(資料 2 6)

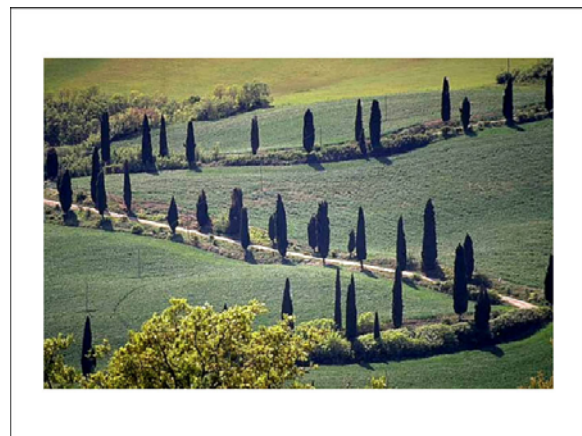


ヴィニオーニ (Vignoni) 教会。

(資料 2 7)



(資料 2 8)



当然ながら、今後とも保存していくべきものとしては、道のほかにもこのような田園、そして田園の風景といったものがあります。

これは地方の道路です。



(資料 2 9)



このように田園の風景のあちこちに古い屋敷が残っています。

(資料 3 0)



こちらも同じような建物です。

(資料 3 1)



こちらはオルチャ渓谷でも非常に典型的な糸杉に沿って、丘に上っていく道が見えています。

(資料 3 2)



このように道に沿って糸杉が並んでいます。ごらんになったこの最後の2つの写真につきましては、中世の道そのままではなくて、やはり近年、整備が行われた例です。

(資料 3 3)



(資料 3 4)



これらの街道に沿いまして、中世の巡礼者たちが旅の途中で立ち寄った宿場町や旅籠(はたご)、

(資料35)



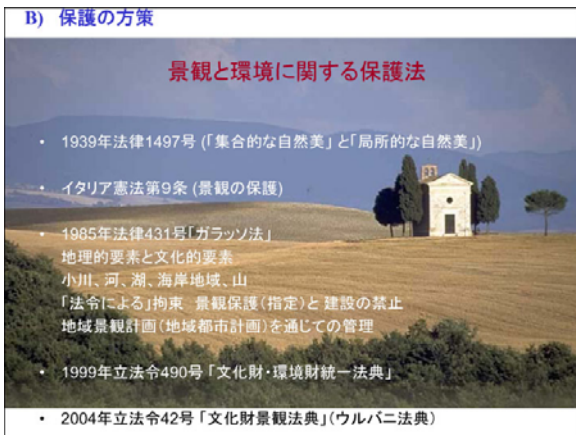
場合によっては病をいやしたような、現代の病院のような機能を持っていたと思われる場所もあります。

(資料36)



例えばこちらは16世紀ですけれども、メディチ家がお金を出してつくった療養所のような機能を持っていた建物です。

(資料37)



ここまでは地方の実際の様子をお見せいた

しました。ここからは、こうした景観や文化的遺産をどのようによりよく保存していくか、保護していくかというための法律や仕組みなどをご説明します。保存・保護といたしますが、それだけではなく、それプラス発展を結びつけた管理と保護ということを前提としております。

まず保護という目的からの法律をご説明します。イタリアでは法律も年々刻々と変わりますので、ずっと同じというわけではありません。まず一番古いのは、1939年にできた景観保護法(文化財保護法・自然美保護法)というものがあるんですけれども、この場合は景観というものを本当に美的対象として、個々のものとしてとらえていました。そして、1948年にイタリア(共和国)の憲法が制定されますけれども、その第9条に景観の保護といったことが記されておりまして、既にこの時点で景観というものが文化的な面だけではなくて、科学的な意味を帯びるようになりました。そして、徐々に景観の環境的な局面が重要視されるようになってまいりました。

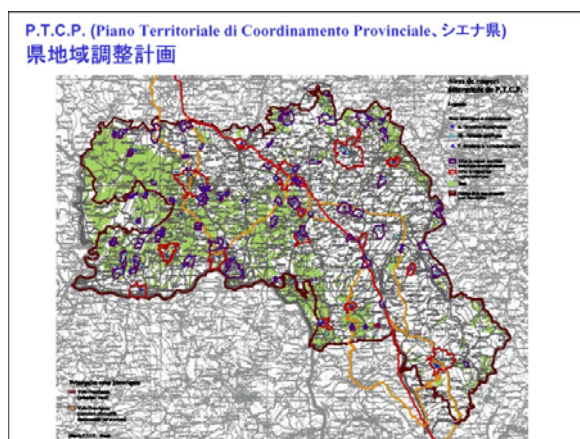
1985年にいわゆる「ガラッソ(Galasso)法」というふうには呼ばれている法律が制定されて、ここにおいては景観と環境というものを一体化させて保護しようという、単に見て美しいものということではなくて、実際に住んでいる環境として景観を守っていこうという取り組みが見られます。その1985年のガラッソ法が、発展的に新たなものにとってかわります。それは1999年で、テスト・ウーニコ(Testo Unico)、「(文化財・環境財)統一法典」というような直訳ができると思いますけれども、テスト・ウーニコという法律が制定されて、ガラッソ法もその中に組み込まれるような形でなくなります。ここでは景観、環境といったものと、文化遺産と両方を保護するための法律となっております。

2004年になりまして、1999年のテスト・ウーニコという法律が改定されます。その後、「ウルバーニ(Urbani)法」というふうには呼ばれるようになります。どのような変化があったか



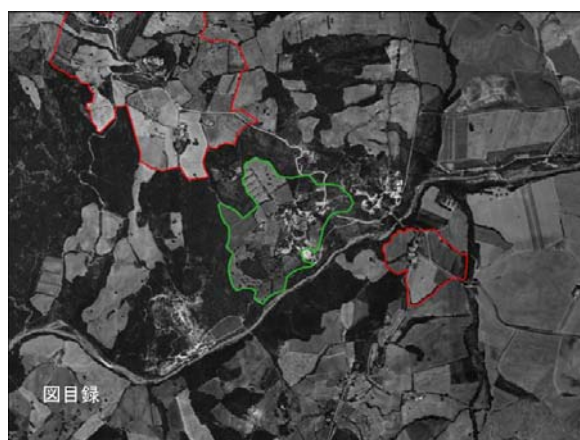
といいますと、'99年のテスト・ウーニコのほうが州に対する権限がより多く与えられることになっていたんですけども、それが一部、中央政府のほうの権限に戻るといような、少し後ろ向きな発展がありました。しかしながらよい意味では、景観というものがさらに文化的な遺産であり、グローバルな、自分たちが住む環境の一部であるといような考え方で大事にされる、そういった意味合いが含められるようになりました。また、いろいろな都市計画などにつきましては、州とか県レベルの条例でもさまざまな具体的なものができております。

(資料38)



例えばこちらは、シエナの県地域調整マスタープランといった条例です。

(資料39)

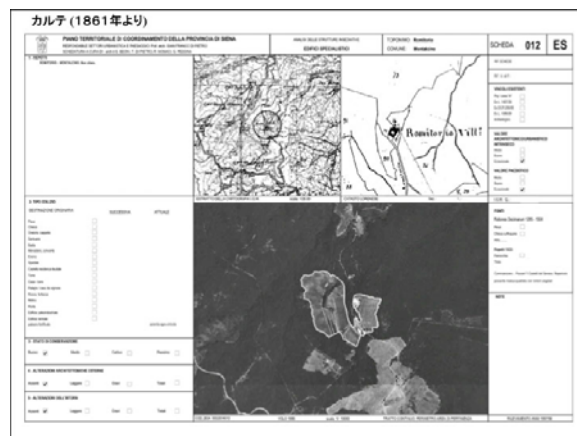


都市計画プランをベースとしておりまして、このマスタープランを立てる上では、まず国勢調査といいますか、地勢調査がいろいろ細かく行われまして、一つの地図情報カタログという

ような形でさまざまな調査による情報をまとめます。

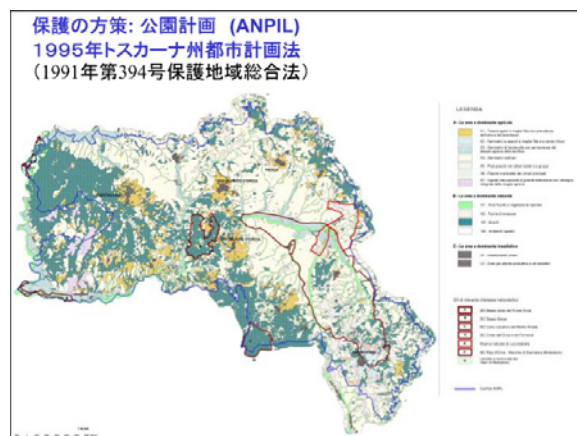
例えばこちらの地図情報を見ていただきますと、緑で囲まれている部分、この地区は一種の規制地区となります。なぜかといいますと、古いお屋敷のような建物、記念建築物などがありますので、その他の建物を建てたり、これらの現存のものに手を加える場合に規制があります。

(資料40)



またそのマスタープランを立てる地域内におけるさまざま歴史的建造物、各対象に対して、こういったカルテがつけられます。このカルテの中には時系列別にその対象物にどういったことが起きたか、現在の状況、保存のための方法などが詳細に記述されています。

(資料41)



このように保護と管理といった2つの要素にプラスして、やはり発展といった要素が必要となってまいります。まさにそのためにですけ

れども、1991年、保護管理、プラス発展というのを見越した保全地区基本法が制定されました。これは国の法律ですけれども、この国の法律によって各州や県にさまざまな具体的な条例をつくるように指示を出しております。

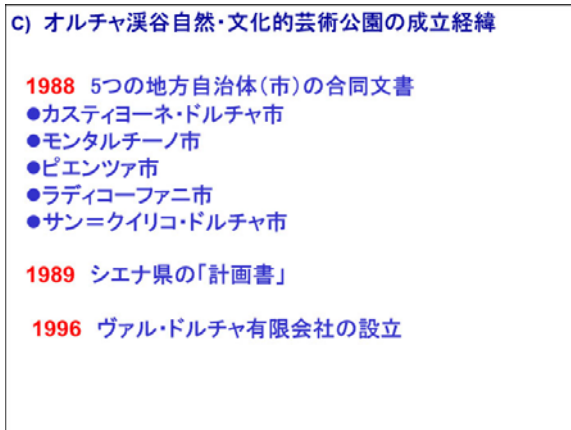
このことにより、1995年にトスカナ州に新たな条例が生まれました。都市計画の条例ですけれども、その中に公園計画といったものが盛り込まれておりまして、これによって地域に利益のある守るべき景観を公園として指定し、そして管理するといった条例が生まれました。そのように地域に利益を持つ景観や自然を指定して保護するといった1995年のアンピル（ANPIL）という州の条例ができて、そこで現在オルチャ渓谷を構成します5つの市町村が州に申し出まして、この地域を指定してほしいというふうな提案をしました。

（資料4 2）



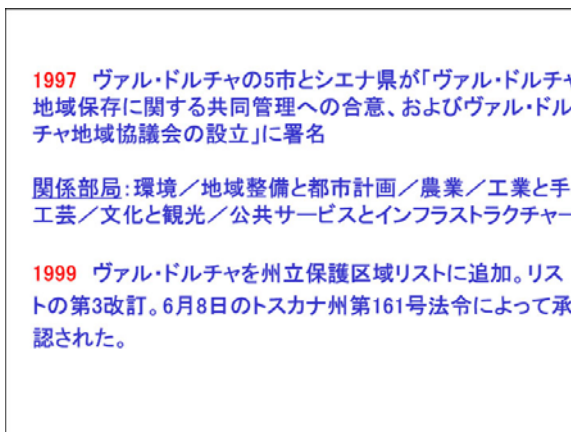
そういった州レベルの条例のほかに、市町村レベルのさまざまな景観や自然保護の条例があります。例えばこちらはモンタルチノ（Montalcino）の町の条例ですけれども、地域内の樹木の伐採や剪定、その他についての細かな規定を持っております。

（資料4 3）



これからは具体例として、こういった条例や法律が生まれた中で、どのようにオルチャ渓谷がその管理計画を立て、実行していったかということをご説明したいと思います。まずその歴史としては、1988年までさかのぼりますけれども——すなわち、まだトスカナ州のそれに沿ったぴったりの条例ができる前ですね、1995年にANPILができますから——そのもっと前の1988年ごろから、オルチャ渓谷に接する5つの市町村が共同でこの地域の保護といったことを考え始めました。共同文書をまとめたのが1988年、そして1989年になりますと、そういった動きにシエナ県もかかわってもらえるようになりました。そして、1995年にトスカナ州の公園法ができましたので、その後1996年に、オルチャ渓谷を管理する主体を有限会社の形で設立することができました。

（資料4 4）



そして1997年に、この5つの市町村とそれを含む県であるシエナ県が合意をいたしました。



て、オルチャ渓谷の保護地域を共同で管理する合意、及びオルチャ渓谷の地域協議会の設立といった合意を実行しました。そして、この地域における環境、工業（製造業）、文化、観光、公共事業といったようなこの地域全体にかかわり、また経済的な利益や発展をもたらすことについて、共同でやっていこうということになりました。1999年には、トスカーナ州の中で地域として利益をもたらすような景観のよい地域を指定して保護していこうという、アンピルという条例の公式保護地域リストにオルチャ渓谷も加盟することができました。

(資料45)

**D) 公園管理の構造と担当**

**公園の運営組織:**

- 地域協議会(5市と県)
- 会員総会(株主)
- ヴァル・ドルチャ有限会社の重役会議

**ヴァル・ドルチャ有限会社の運営**

- 職員: 常勤5名・非常勤3名

**持続可能なエコ開発**




次に、オルチャ渓谷を管理・運営していく組織がどのようになっているか、もう少し詳しく説明いたします。有限会社として設立したと先ほども申しました。これをどのように実際に統治しているのか、統治のシステムをまず説明しますと、一番上にあるのは地域協議会というものです。この地域協議会のメンバーは、シエナ県知事と5つの市町村長です。その次にありますのが会員総会です。この会員総会のメンバー、すなわち会員はだれかといいますと、シエナ県、5つの市町村、プラス民間の人たち、もしくは法人というのが入っております。その下の組織といたしまして、オルチャ渓谷有限会社の取締役会というのがあります。実際にこの管理・運營業務に当たる人間ですけれども、常勤が5人、期間契約者が3人おります。ですから、本当に小さい組織でありますけれども、この地域における生態系的に持続可能な経済発展を目

指して管理・運営をしています。

(資料46)

**公園担当の領域**

- 環境と景観の保護
- 都市計画と公共事業
- 観光促進
- 文化と演劇
- 特産物の促進
- 高齢者を対象とした福祉事業
- 5つの地方自治体(市)共通のサービスを設置

この管理・運営の中でこういった活動を行っているかを幾つかに分けて説明しますと、まず環境と景観の保護、2つ目は都市計画や公共事業に関するもの、3つ目は観光の振興、プロモーション、4つ目は文化や演劇活動などの振興、5つ目は特産品の振興で、これについては後ほどもう少し詳しくお伝えいたします。

(資料47)

**地域協議会が定めた運営方針(1999-2004年)**

- 環境、景観、文化、地域固有の伝統、周辺地域を完全な状態に保ちながら観光を展開する。
- 歴史・芸術・文化・宗教的特色をさまざまに発見してゆけるような企画を通じて観光客を呼び込む。
- 農業の方向転換と価値の付与。家畜業とその副産物の価値を見直す(生産物の成分規定書に示される品質を保持し向上させることによって、ブランド(商標)を定着させる取り組み等)。
- 小企業、商業、手工芸の保護と発展(特に伝統の美術工芸細工)。同時に、観光客の誘致や滞在サービスを強化。

そして、5つの市町村に共通なサービスの運営を行います。先ほどのフランスの事例とも少し重なってくるかと思えますけれども、やはりこちらにおきましても、地域の環境や景観、文化、伝統、こういったものとマッチしながら進めていけるような発展を目標としております。別の言葉で言いますと、ツーリズム(観光)を振興していきますけれども、そのプロセスの中で自然や景観に損害を与えないということですから。そしてツーリスト(訪問者)に対してこの

地域の文化や芸術、宗教などの特色を発見してもらい、また再発見してもらおうということに結びつけたいと思います。

そして、あと2つはさらに経済発展とも強く結びついてくるのですが、その一つ目は、農業や畜産の転換とさらなる価値づけ、産物・副産物の付加価値化、ブランド育成といったようなことです。もう一つは、観光とも非常に密接なわけですが、特産品とか伝統工芸などの手工業の小規模事業者の保護や発展促進、また宿泊施設などの受け入れ先の強化といったものです。

(資料48)

**2003年に可決された2つの条例**

- **公園計画の条例 (ANPIL)**

**地域の価値の保持と公共や民間事業の両立を目的とする規定**

- **統一された建築法規**

**地域全体の手続きと規定を統一する**

そして、アンピルという条例をさらに補完するような条例が2003年に2つできました。一つ目は、官と民のアクションに整合性をもたらす。別の言葉で言いますと、官と民の資金と一緒にして何かに用いるといったようなことができる規定です。もう一つは、統一建築基準といたしまして、この地域全体の建築基準を統一した規定です。

(資料49)

**E) 計画  
計画リスト、2003—2006年の改訂**

Description de Projet	Total (€)	2003 (€)	2004 (€)	2005 (€)	2006 (€)
1 公園計画の規制	15,000	15,000			
2 建築法規	15,000	15,000			
3 地域の航空写真	15,000		7,500		7,500
4 地図の改訂	6,000		3,000		3,000
5 交通警官	175,000		175,000		
6 電線	3,000,000	750,000	750,000	750,000	750,000
7 休憩スポットの整備	30,000	7,500	7,500	7,500	7,500
8 ルッチョロベツ自然保護区域	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
9 路上	50,000	12,500	12,500	12,500	12,500
10 研修コース	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
11 教育コース	300,000	150,000	150,000		
12 自然地域の整備	200,000	50,000	50,000	50,000	50,000
13 スベダレ・ベレグリーニ(巡礼者の病院)	500,000	125,000	125,000	125,000	125,000
14 ツチコフカ岩への道標	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
15 モンタルオーノ岩	200,000	65,000	65,000	65,000	65,000
16 モンタルオーノ岩	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
17 キジ館	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
18 電線地中化	500,000	125,000	125,000	125,000	125,000
19 文化的教育コース	500,000	125,000	125,000	125,000	125,000
20 地質学的調査の整備	100,000	100,000			
21 オルチャ渓谷フェスティバル	10,000	2,500	2,500	2,500	2,500
22 ガスシステム	500,000	100,000	100,000	100,000	100,000
23 全地域におけるメタンガス(天然ガス)網	100,000	25,000	25,000	25,000	25,000
24 1の整備	150,000	37,500	37,500	37,500	37,500
25 統合された交通機関	2,500,000	625,000	625,000	625,000	625,000
26 合計	400,000	400,000			
合計	9,826,000	3,030,000	2,185,500	2,375,000	2,236,500

このように財政が整いまして、2003年から2006年の間にどのような活動をやったか、その活動の項目と予算がここに書いてあります。予算はユーロで示してあります。非常に広範囲な内容の活動をしております。例えば航空写真を撮ったときの費用が幾らとか、電気の配線類についての整備が幾ら、ガイドの養成とか、また遊歩道の整備、その費用が幾らといったことがここで見られます。

(資料50)

**2003—2006年計画、資金の出処**

金額	金額	財源
公園計画の規制	15,000	プルスト(Prusati)
建築法規	15,000	市
地域の航空写真	15,000	県、市
地図の改訂	6,000	県、市
交通警官	175,000	モンテ・デ・バスキ・ド・インエナ財団(MPS財団)、州、市
電線	3,000,000	プルスト、県、MPS財団、欧州連合、市
休憩スポットの整備	30,000	県
ルッチョロベツ自然保護区域	100,000	県、MPS財団、欧州連合
路上	50,000	県、州、民間
研修	100,000	県、MPS財団、欧州連合、市
教育コース	300,000	県、MPS財団、欧州連合、市
自然地域の整備	200,000	MPS財団、市
オルチャ渓谷	500,000	県、MPS財団、欧州連合
スベダレ・ベレグリーニ(巡礼者の病院)	100,000	MPS財団、欧州連合、州
ツチコフカ岩への道標	200,000	プルスト、MPS財団、欧州連合
モンタルオーノ岩	100,000	県、MPS財団、欧州連合
モンタルオーノ岩	100,000	県、MPS財団、欧州連合
キジ館	500,000	MPS財団、州、国
電線地中化	500,000	プルスト、MPS財団、欧州連合、民間
文化的教育コース	100,000	県、市
地質学的調査の整備	10,000	県、市
オルチャ渓谷フェスティバル	500,000	県、州、市、民間、山自治体
ガスシステム	100,000	県、市
メタンガス網	150,000	市、民間
全地域天然ガス網の整備	2,500,000	プルスト、MPS財団、欧州連合、民間
統合された交通機関	400,000	県、州、市、山自治体
合計	9,826,000	

いま申し上げましたさまざまなプロジェクトを行っていく上での出資金の供給元ですけれども、ここにそのリストがあります。これもやはり2003年から2006年のプログラムのための出資元ですけれども、まず民間の名前がありまして、市町村や州の交付金があります。またEUの補助金などもあります。





テムに対するご褒美であったわけです。またそこが出发点となって、これからもよりよい管理・運営をしていくということになります。

(資料55)



幾つかのプロジェクトの例ですけれども、これは古代ローマ時代から温泉があったところで、そういった意味で非常に価値のある地域や建造物です。バーニョ・ヴィニョーニ (Bagno Vignoni)、この区画が非常によく再構築されました。

(資料56)



またこちらの例は水車の公園といいまして、これは昔、オリーブの実を圧搾してオリーブオイルをつくったところを再現して公園としました。右下のほうは、オルティ・レオニーニ (Horti Leonini) という庭園です。こちらもきれいに再整備されまして、特に夏の間は現代アートの展示会場として使われます。

(資料57)



これは遊歩道の途中につくられた休憩所の例ですけれども、できるだけ自然に対してインパクトの少ない形で介入しようとしている例です。

(資料58)



また、このオルチャ渓谷をイタリアの国民の方にもよく知っていただくために、ツーリングクラブ (・イタリアーノ) とタイアップしまして、このようなガイドブックにもまとめました。この中には歴史的な遊歩道や道筋、街道といったものを紹介し、その観光がよりよくできるようになっています。



(資料 5 9)



こちらツアーリングクラブ・イタリアーノによってつくってもらった、フランチージェナ街道に関するガイドブックです。

(資料 6 1)



こちらやはり歴史的な芸術的な価値のある場所、見どころが茶色で示されています。

(資料 6 0)



こちらは、表示や看板をわかりやすく新しく手直ししたりしている例です。先ほどのフランスの事例でもありましたように、景観として、また自然遺産としての価値のあるところはこのように茶色の看板で示されています。

(資料 6 2)



また昔存在していた鉄道、軌道といったものを復活させました。

(資料 6 3)

**観光客の増加**

当初、観光客はモンタルチーノ市、ピエンツァ市、サン＝クイリコ＝ドルチャ市に多く、その後、さまざまな企画によって、周辺部にも流れるようになった。

地域の観光業者がイニシアティブをとって観光業者組合を設立。

COMUNE	観光客の人数												2010年からの増加率	2010年からの観光客の増加率			
	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003					
モンタルチーノ	7,620	7,710	20,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710	21,710
ピエンツァ	6,200	7,400	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100	13,100
サン＝クイリコ＝ドルチャ	11,000	12,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400	17,400
周辺部	3,800	4,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600	9,600
合計	29,420	34,110	60,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810	61,810
観光客の増加率	80%	80%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
観光客の増加率	80%	80%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

こちらは観光業として結果をとらえたものですけれども、1992 年から 2003 年までの間を比較しますと、ツーリスト（訪問者）の数は

166%になっております。ですから、66%増加したということです。またアグリツーリズムのほうの11年間をみますと、198%の数字になっております。98%の増加ということになります。

(資料6 4)

**受け入れ施設の増加**

受け入れ施設の大部分は荒廃した既存の建物を再生・再利用した。  
観光客数も年々安定し、現在、遺産価値の保存を妨げることはない。

年	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024																																															
観光客数	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250	260	270	280	290	300	310	320	330	340	350	360	370	380	390	400	410	420	430	440	450	460	470	480	490	500	510	520	530	540	550	560	570	580	590	600	610	620	630	640	650	660	670	680	690	700	710	720	730	740	750	760	770	780	790	800	810	820	830	840	850	860	870	880	890	900	910	920	930	940	950	960	970	980	990	1000

また宿泊施設の強化といったことも目標に挙げられておりましたが、このように非常に宿泊のベッド数がふえました。できるだけ既存の建物などの活用を行って、ベッド数を多くするという努力をしています。

(資料6 5)

**高品質農業の価値付け**

・景観と農産物の品質を連結させることにより、高品質農業を価値付け  
・いくつもの農産物の新しい商標を促進

**1996年以降、ヴァル・ドルチャ・ブランド以外の特産物の商標**  
 >ワイン - DOC (統制原産地呼称) オルチャ; サンタンティモ DOC  
 >オイル - IGP (保護指定地域表示) トスカーナ州; DOP (保護指定原産地表示) シエナの土地  
 >栗 - IGP アミアティーナ栗

**耕地の価値の増加**

耕地のヘクタール当たりの地価  
 >1996年 1,500万リラから30,000万リラ  
 >2004年 2万ユーロから2万5千ユーロ  
 (ただし、1ヘクタール30万ユーロもするブルネッコ耕地は含まない)

先ほど申しましたけれども、景観を守っていくためには、その地域の農業自体の品質を高めたい必要があると思っております。実際その結果が出てきております。具体的には、例えばこの地域で生産されるワインが、国レベルの認証でありますDOC(原産地統制名称)の認証をとれたことで、「DOC Orcia」というワインとして認められています。そして、オリーブ

オイル、クリの生産でも認証をもらっていて、品質の高いものであるというふうに分かるようになりました。このような結果を出せたということは、農業用地としてもその土地の価値が非常に上がっております。

(資料6 6)

**人口減少が押さえられた**

- 1951-1991年の間、人口が50%減少
- ここ10年、人口は基本的に変化しない

Comune	Anno 1951	Anno 1971	Anno 1991	Anno 1996	Anno 1997	Anno 1998	Anno 1999	Anno 2000	Anno 2002	Anno 2003	Anno 2005	面積 ha
カステリゴッレ	5244	3573	2840	2646	2620	2568	2532	2515	2536	2551	2551	14,184
モンタルチャー	10203	6297	5088	5047	5044	5072	5100	5123	5149	5118	5118	24,362
ピエンツァ	4770	2949	2330	2281	2281	2281	2288	2257	2259	2226	2226	12,253
ラヴィンツォ	2699	1524	1300	1255	1247	1231	1229	1221	1230	1229	1229	11,846
サンペトリ	2336	2256	2389	2447	2441	2448	2443	2478	2491	2531	2531	4,217

もう一つの好ましい結果というのは、人口の減少に歯どめがかけられたということです。特にこの地方におきましては1950年代に大きな人口の減少がありまして、それが農地の荒廃にもつながったわけです。実際、50%近い人口の低下が1950年代にありました。その後、こういった一連の努力の結果、近年少しずつ人口が上がっております。この五つの市町村の中で個別に見てみますと、近年幾つか下がったところもあるんですけども、全体としては人口が上がってきております。

(資料6 7)

**管理費**

- ヴァル・ドルチャ有限会社の経費は、公共資金で最初から5つの市と県が負担した
- しかし、現在では直接経営している活動(主に観光サービスの収入によって徐々に自立へ)

そして、結論部分となりますけれども、オルチャ渓谷有限会社という主体ができ、活動が行

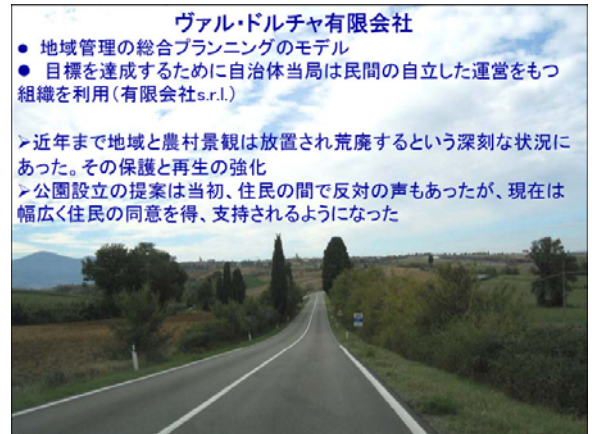


われました。これは公的資金を使って立ち上げた民間の会社であります。しかし、その目的は公共の利益といったことであります。

結果として、市町村と県の出資によって立ち上がり活動を始めた主体ですが、その直接行っている活動によって、徐々に収入、利益がふえてきている状況にあります。

そして、独立採算に近づいているということ、また別の面から見ますと、最初は住民や地域から疑問視されたときもあったんですけども、現在としてはその構想や活動について広くコンセンサスをもらい、支持され、参加してもらっているという現実があります。

(資料68)



皆様、ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

